（３） 性感染症定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科泌尿器科学分野
教授　　榎田　英樹

鹿児島県における性感染症（4 性感染症と梅毒感染）の報告総数は 2003 年の 1800 人超をピークに減少傾向であったが 2013 年以降は再び増加していた（図 1)。しかしながら 2024 年は前年に比べて各性感染症の報告数が 4 年ぶりに減少し,総数でも 1246 人で前年に比べて 233 人（15.8%）の減少となった（図 1・2)。しかしながらこの 12 年間に梅毒を含む性感染症総数は 2.1 倍に増加し，特に梅毒は 18.4 倍に増加し，他の性感染症に比べて急増していた（図 3・4)。この傾向は全国でも報告され，厚生労働省からは注意喚起がなされている。2024 年 1 月から 12 月における鹿児島県内 16 定点からの報告数は，(1) 性器クラミジア感染症 647 人，(2) 性器ヘルペスウイルス感染症 79 人，(3) 尖圭コンジローマ 95 人，(4) 淋菌感染症 296 人，鹿児島県内全医療機関からの報告は，(5) 梅毒 129 人であり，尖圭コンジローマを除く 4 疾患において報告数の減少が見られた。特に性器ヘルペスウイルス感染症は昨年比で 35.2%減であった。淋菌感染症は昨年比 24.1%減，性器クラミジア感染症は昨年比 9.6%減，梅毒は昨年比 21.3%減少した。また尖圭コンジローマのみ昨年比で 9.1%増であった。

(1) 性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* が原因微生物の性感染症であり，男性では尿道炎，精巣上体炎を，女性では子宮頚管炎，骨盤腹膜炎などを発症する。2024 年の患者数は，2023 年の 716 人から 69 人（9.6%）減少し 647 人であった。月別の報告数は 2022 年，2023 年と比較すると 6 月と 12 月の報告数が減少していた。累積定点当たりの報告数は全国平均の 1.3 倍で推移した。年齢層別の比率をみると，7 年連続で 20～24 歳（29.1%)，25～29 歳，30～34 歳の順に多く，これらの 3 年齢層で全体の 63.2%を占めていた。また 15～19 歳における患者数は 61 人で前年比 4 人増であった。15 歳～29 歳の性器クラミジア感染症患者 400 人は 4 性感染症全体の 35.8%を占め，同年代での男女比は 1.7：1 で男性の比率が高かった。保健所別報告数では，鹿児島市，姶良，川薩，の順に多く，3 か所で全体の 90.3%を占めた。

(2) 性器ヘルペスウイルス感染症は，単純ヘルペスウイルス（herpes simplex virus：HSV，HSV 1 型又は 2 型）の感染により発症する。2024 年は 79 人が報告され，2023 年の 122 人から 43 人（35.2%）減少した。全体の男女比は 1：2.0 で 4 性感染症の中で唯一女性の比率が高かった。年齢層では 20～44 歳の患者が 48 人と全体の 60.8%を占めていた。月別の報告数は 5・6 月がやや多かった。累積定点当たりの報告数は全国平均の 0.5 倍で推移した。保健所別報告数では，鹿児島市が 45 人と最も多く，全体の 57.0%を占めた。

(3) 尖圭コンジローマは，ヒトパピローマウイルス（ヒト乳頭腫ウイルス：HPV）の感染により，性器周辺に生じる有疣状腫瘍である。2024 年の患者数は 95 人であり，2023 年の 87 人より 8 人（9.2%）増加した。男女比は 3.5：1 と圧倒的に男性で多く見

られた。年齢層では20～44歳の患者が72人と全体の75.8%を占めていた。月別の報告数は，7・8月がやや多かった。累積定点当たりの報告数は全国平均の0.9倍で推移した。保健所別報告数では鹿児島市,姶良の順に多く,併せて全体の92.6%を占めた。

(4) 淋菌感染症は*Neisseria gonorrhoeae*による性感染症であり，男性では尿道炎，精巣上体炎を，女性では子宮頚管炎や骨盤腹膜炎を発症する。2024年の淋菌感染症の患者数は296人であり，2023年の390人から94人（24.1%）減少した。月別の報告数をみると11・12月ではやや少なく，月別の報告数は定点あたり1.13～1.81人で推移し，2023年と比較して2月を除くすべての月で報告数が減少していた。それでも累積定点当たりの報告数は全国平均の2.1倍と多かった。保健所別報告数では，姶良，鹿児島市，川薩の順に多く全体の94.3%を占め，特に姶良からの報告は全体の55.7%と突出していた。年齢層別には15歳～29歳の年齢層が全体の58.4%を占めた。男女比は4.2：1と男性で多く見られた。

(5) 梅毒は梅毒トレポネーマ（*Treponema pallidum*）による性感染症であり，進行すると特徴的なバラ疹が見られるが潜伏感染することもあり，適切な診断・治療が行われなければ心血管梅毒や神経梅毒などの重篤な症状を呈する。2024年の患者数は129人であり，2023年の164人より35人（21.3%）減少したが，2013年比では性感染症の中で最も増加しており注意が必要である。保健所別報告数では鹿児島市，姶良の順に多く，併せて全体の78.3%を占めた。

2024年の4性感染症発生動向の特徴であるが,尖圭コンジローマを除く3性感染症においてそれぞれの報告数が 2023 年と比較して減少し，4 性感染症全体としては 4 年ぶりに減少となったことは特筆すべきである。4性感染症すべてにおいて20歳～29歳の比率が30歳～39歳の比率と比べて高かったことは例年通りであった。また性感染症4疾患のなかで女性の占める比率が最も少なかったのは淋菌感染症（19.2%）であり，昨年までの尖圭コンジローマ（22.1%）に置き換わった。また全ての性感染症において，15～19歳の感染総数は92名で前年比8人減（-8.0%）であり，未成年者の感染増にも歯止めがかかった状況ではあるが，感染総数の8.2%を占め依然として高く今後の動向について注視しなければならない。前年に引き続き，淋菌感染症においては姶良保健所からの報告数が最も多かったことが地域的な特徴であった。

鹿児島県の4性感染症発生状況の年次推移と疾患別男女比について: 4性感染症全体の1定点あたり報告数の年次推移を見ると,2024年は69.8であった。2023年は82.2であったので15.1%の減少となり,報告総数ともに4年ぶりに減少となったが今後の推移を注視したい（図1)。全体の男女比は2.4：1と男性の比率は前年に比べ低くなった（2023年の男女比2.9：1)。性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ2.３:1,4.2:1であった。これも前年に比べて男性の比率は低くなっている(2023年の性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ3.0：1，4.7：1)。性器クラミジア感染症は女性患者が多いとする厚生科学研究班の全国サーベイランス報告や全国総数の男女比とは異なった結果であり，本県の性感染症の特徴として今後も動向の監視が必要である。

図１

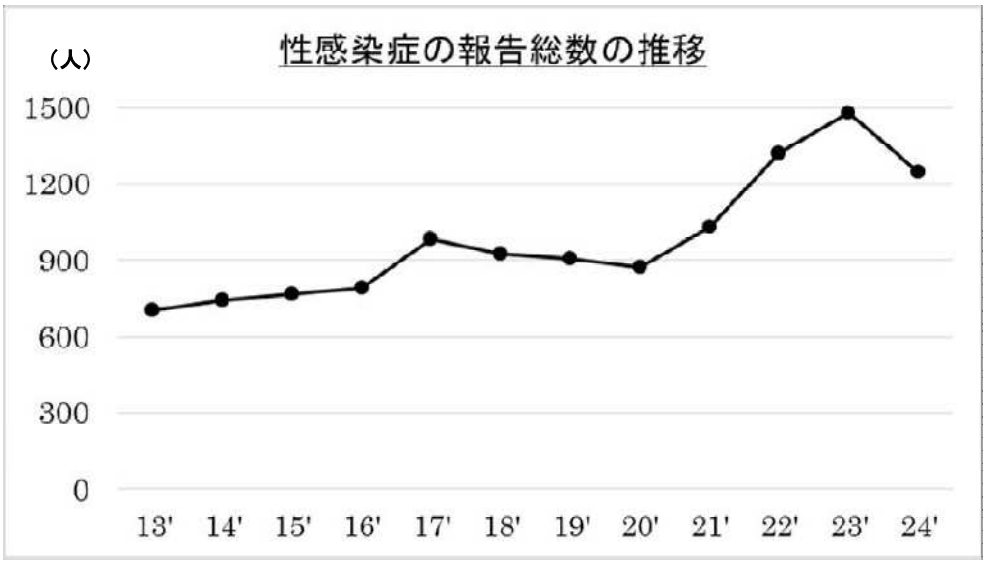

性感染症の報告総数の推移
（人）
1500
1200
900
600
300
0
13'
14'
15'
16'
17'
18'
19'
20'
21'
22'
23'
24'

図２

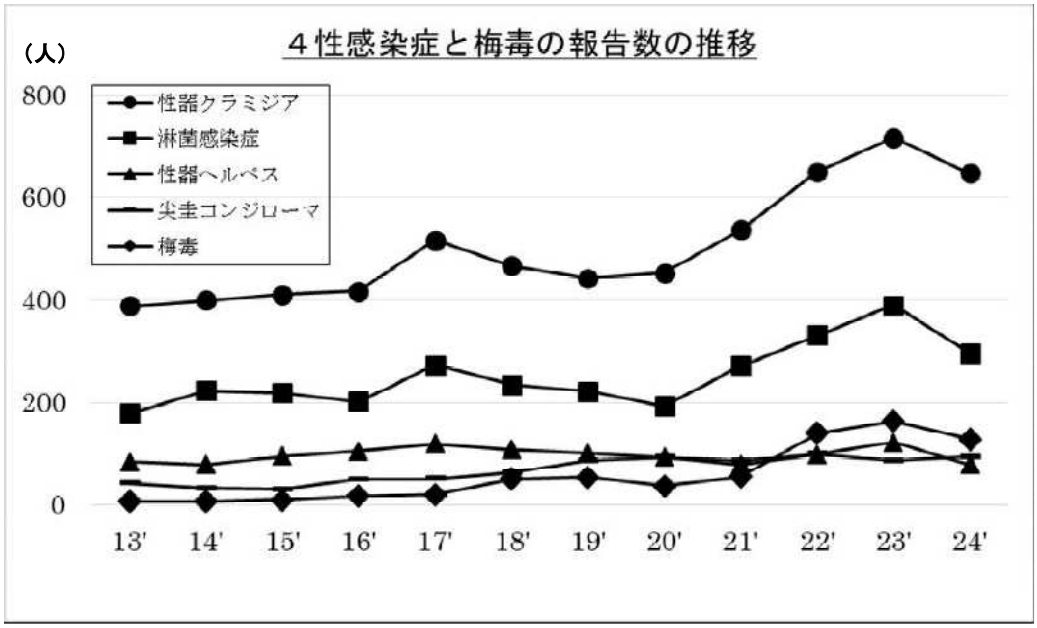

４性感染症と梅毒の報告数の推移
（人）
800
600
400
200
0
性器クラミジア
淋菌感染症
性器ヘルペス
尖圭コンジローマ
梅毒
13'
14'
15'
16'
17'
18'
19'
20'
21'
22'
23'
24'

図３

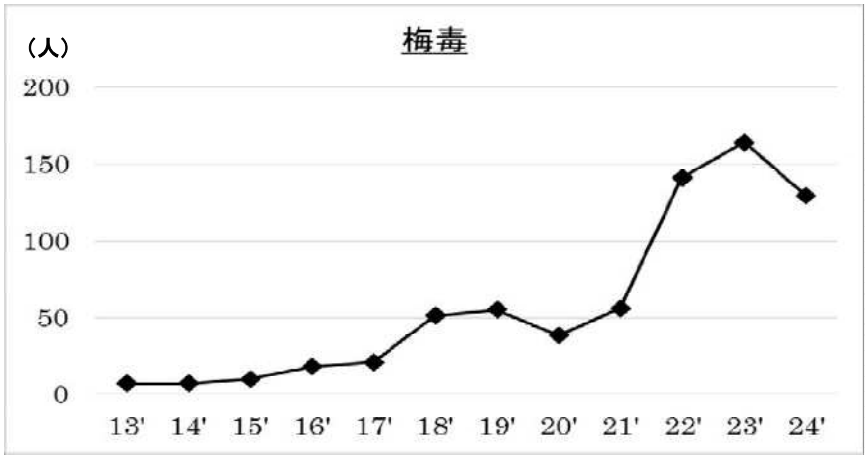
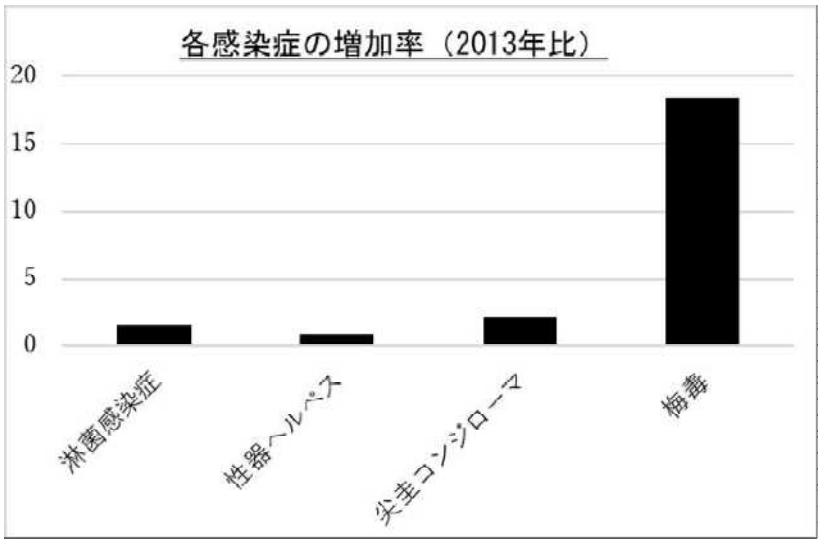

梅毒
（人）
200
150
100
50
0
13'
14'
15'
16'
17'
18'
19'
20'
21'
22'
23'
24'

図４


各感染症の増加率（2013年比）
20
15
10
5
0
淋菌感染症
性器ヘルペス
尖圭コンジローマ
梅毒

23)性器クラミジア感染症

（定義）*Chlamydia trachomatis* による性感染症である。

令和６年の性器クラミジア感染症は，性感染症定点医療機関から647人(累積定点当たり報告数40.44)の報告があり，令和５年(716人)より69人少なかった。月別報告数では，10月(66人)が最も多かった(図２-23-１)。累積定点当たり報告数をみると本県(40.44)は全国(30.38)の約1.3倍であった。６月以外の月で全国の定点当たり報告数を上回った(図２-23-２)。年齢別では，20～24歳(29.1%)，25～29歳(23.3%)，30～34歳(10.8%)の順に多かった(図２-23-３)。

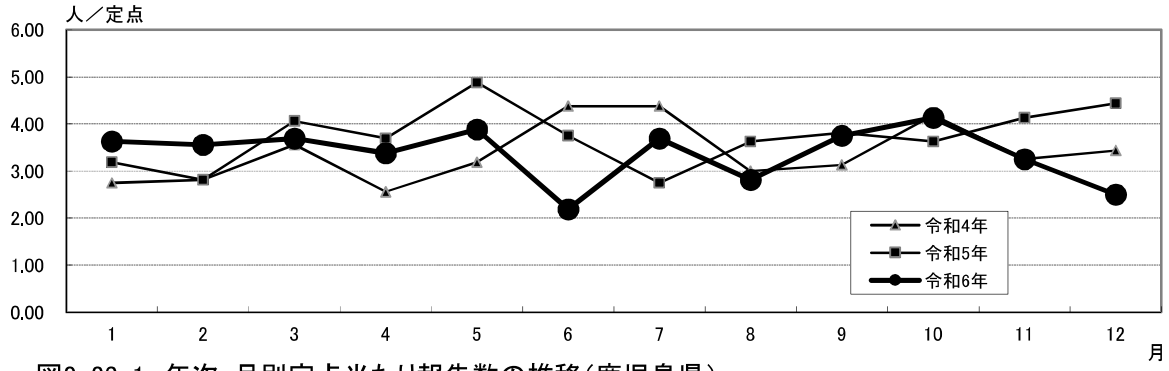


図2-23-1　年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

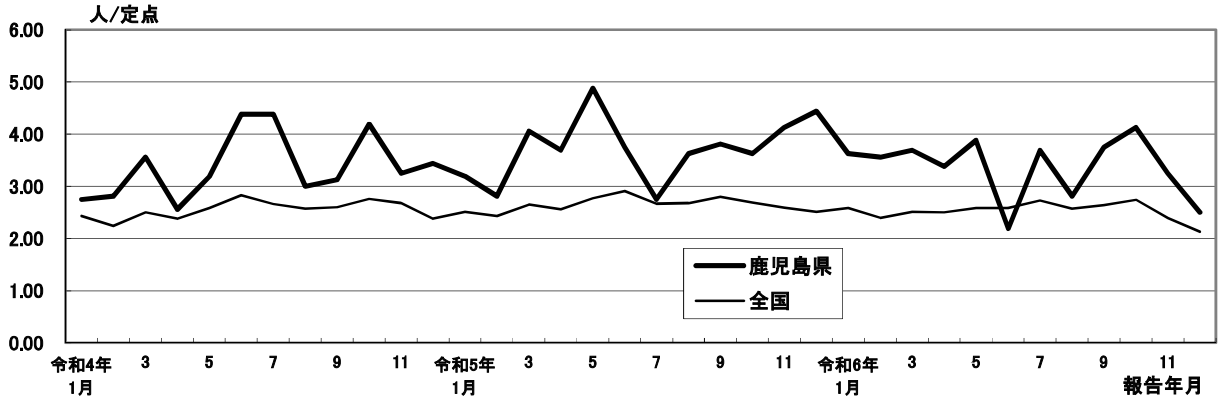


図2-23-2　定点当たり報告数の推移(鹿児島県，全国)

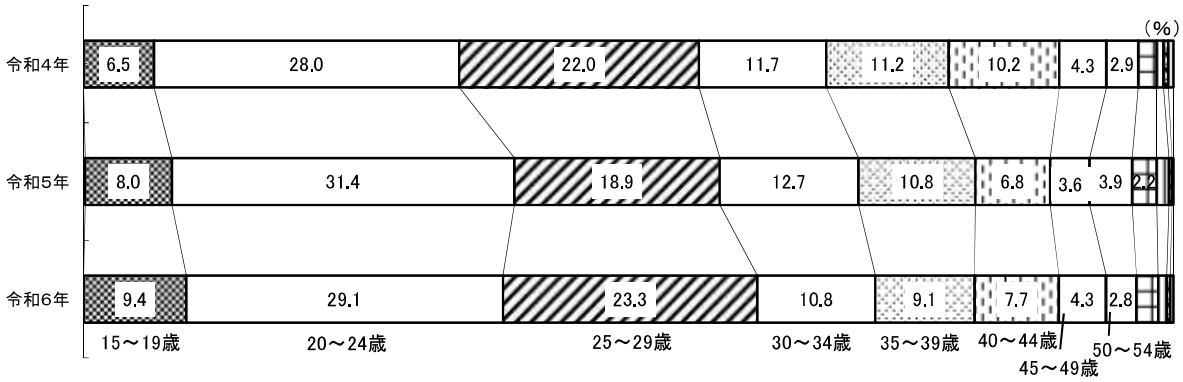


図2-23-3　年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

24)性器ヘルペスウイルス感染症

（定義）　単純ヘルペスウイルス（herpes simplex virus:HSV, HSV1型又は2型）が感染し，性器またはその付近に発症したものを性器ヘルペスという。

令和６年の性器ヘルペスウイルス感染症は，性感染症定点医療機関から79人（累積定点当たり報告数4.94）の報告があり，令和５年（122人）より43人少なかった。月別報告数では，６月（13人）が最も多かった（図２-24-１）。累積定点当たり報告数をみると本県（4.94）は全国（10.20）の約0.5倍であった（図２-24-２）。年齢別では，25～29歳，40～44歳（それぞれ15.2%），30～34歳（13.9%），45～49歳（11.4%）の順に多かった（図２-24-３）。

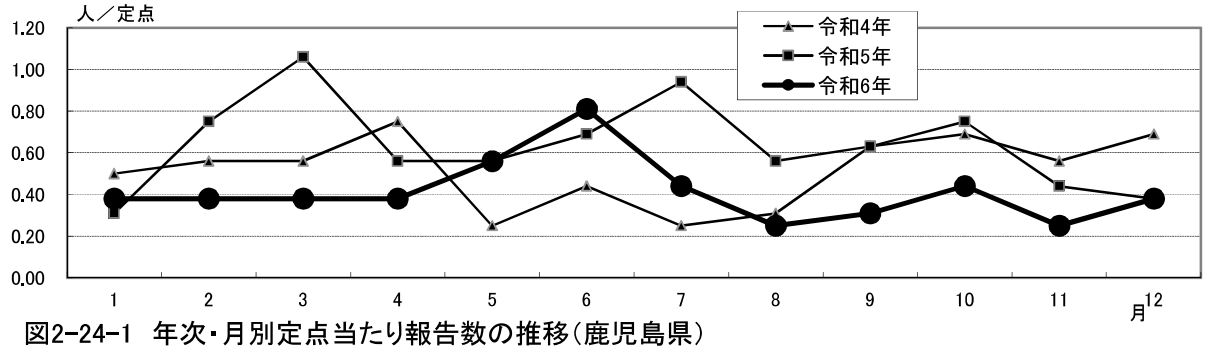


図2-24-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

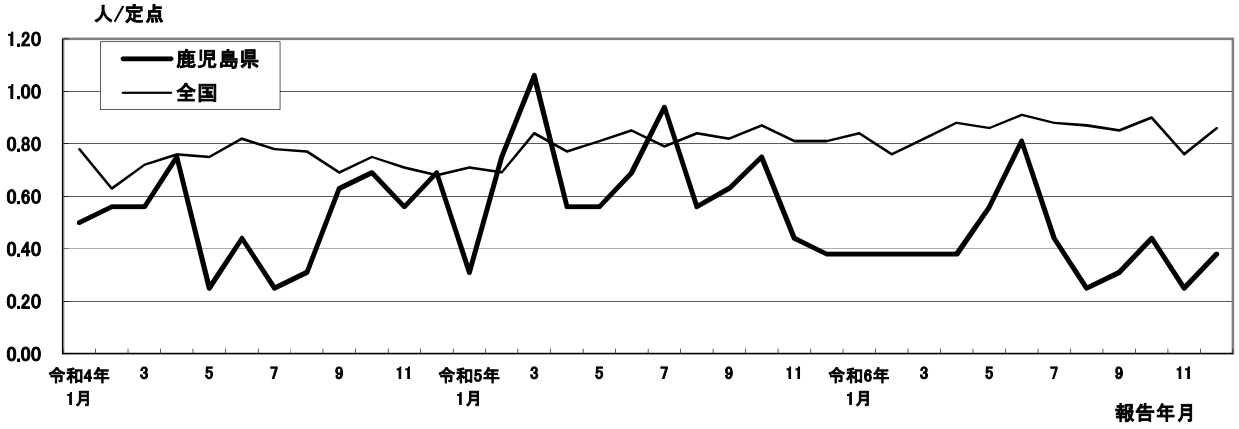


図2-24-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

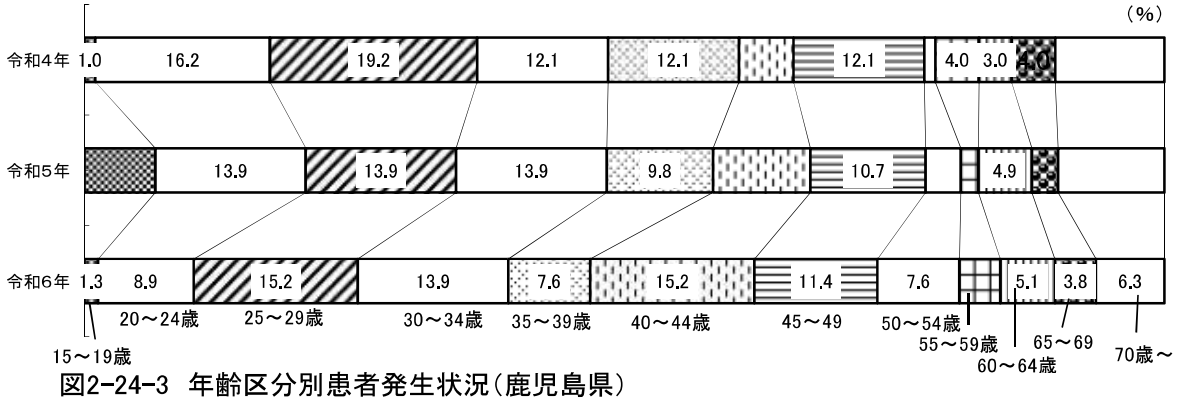


図2-24-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）

25)尖圭コンジローマ

（定義）尖圭コンジローマは，ヒトパピローマウイルス（ヒト乳頭腫ウイルス，HPV）の感染により，性器周辺に生じる腫瘍である。ヒトパピローマウイルスは，80種以上が知られているが，尖圭コンジローマの原因となるのは，主にHPV6型とHPV11型であり，時にHPV16型の感染でも生じる。

令和６年の尖圭コンジローマは，性感染症定点医療機関から95人（累積定点当たり報告数5.94）の報告があり，令和５年（87人）より８人多かった。月別報告数では，１月・８月（それぞれ12人）が多かった（図２-25-１）。累積定点当たり報告数をみると本県（5.94）は全国（6.51）の約0.9倍であった。１月，４月，７月，８月，９月は全国の定点当たり報告数を上回った（図２-25-２）。年齢別では，20～24歳（30.5%），25～29歳（14.7%），35～39歳（12.6%）の順に多かった（図２-25-３）。

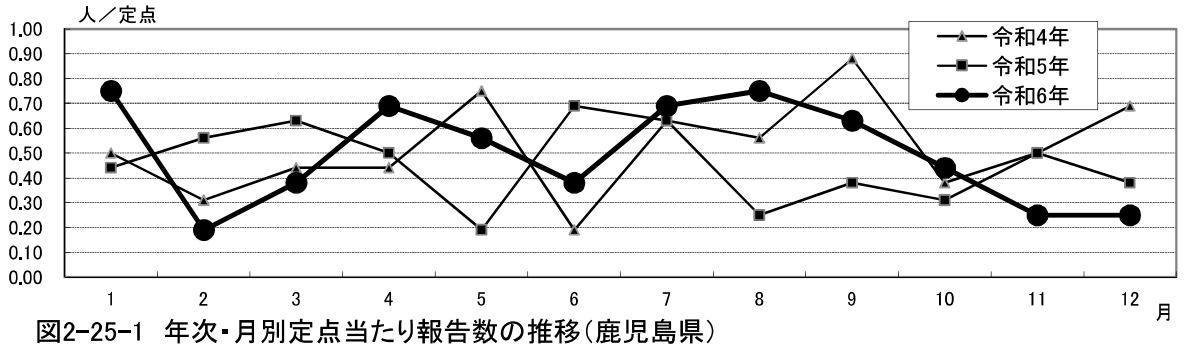


図2-25-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

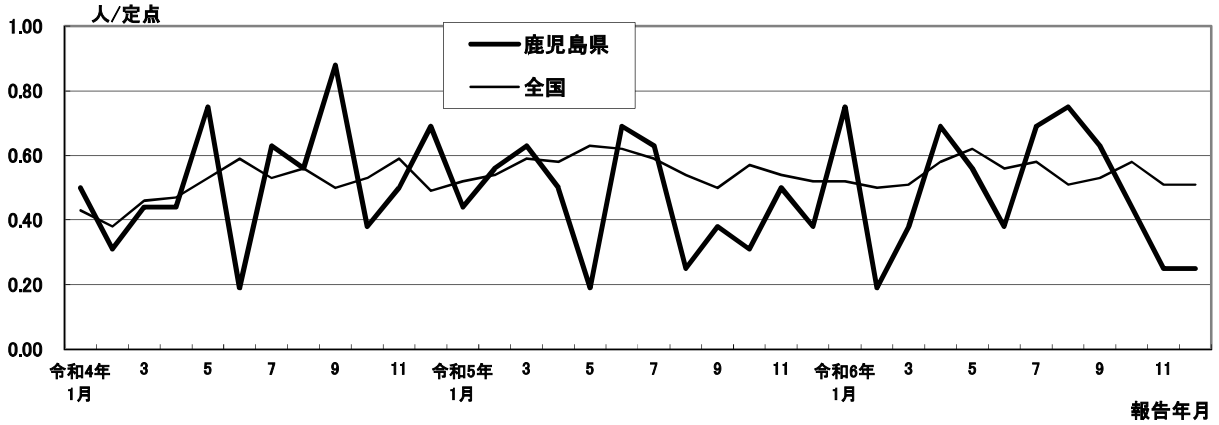


図2-25-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

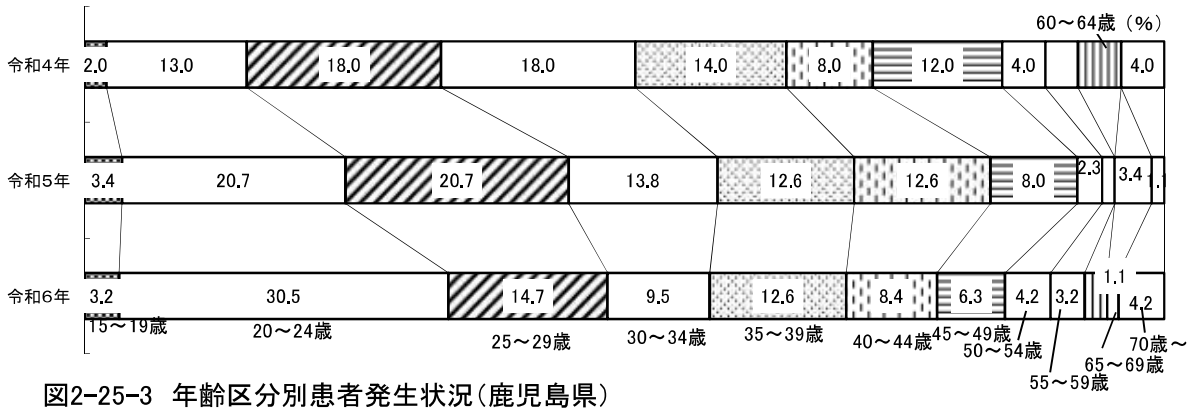


図2-25-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）

26)淋菌感染症

（定義）　淋菌（*Neisseria gonorrhoeae*）による性感染症である。

令和６年の淋菌感染症は，性感染症定点医療機関から296人（累積定点当たり報告数18.50）の報告があり，令和５年（390人）より94人少なかった。月別報告数では，２月・８月・10月（それぞれ29人）が多く（図２-26-１），累積定点当たり報告数をみると本県（18.50）は全国（8.96）の約2.1倍であった。すべての月で全国の定点当たり報告数を上回った（図２-26-２）。年齢別では，20～24歳（31.8％），25～29歳（17.6％），30～34歳（13.9％）の順に多かった（図２-26-３）。

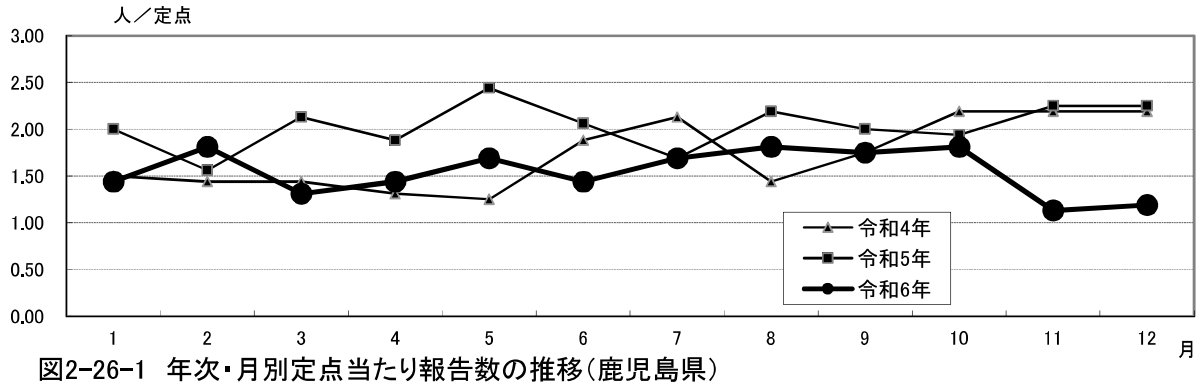


図2-26-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

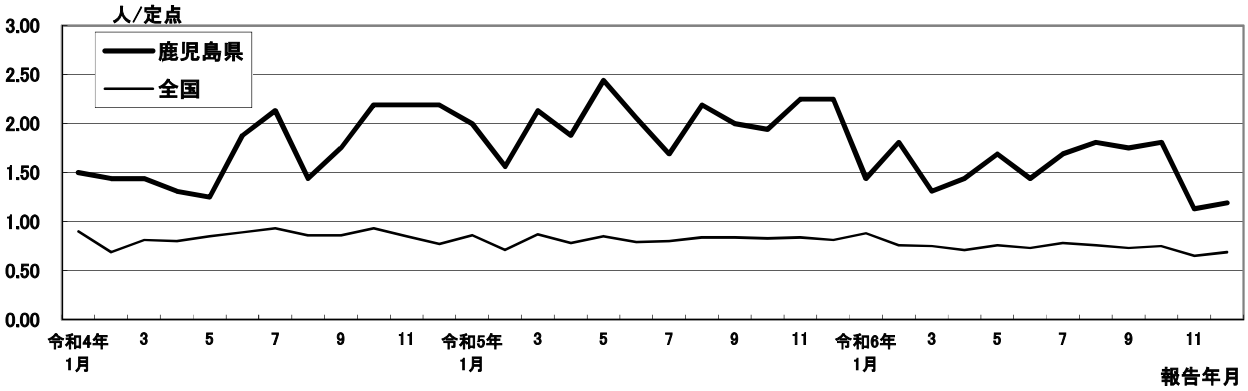


図2-26-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

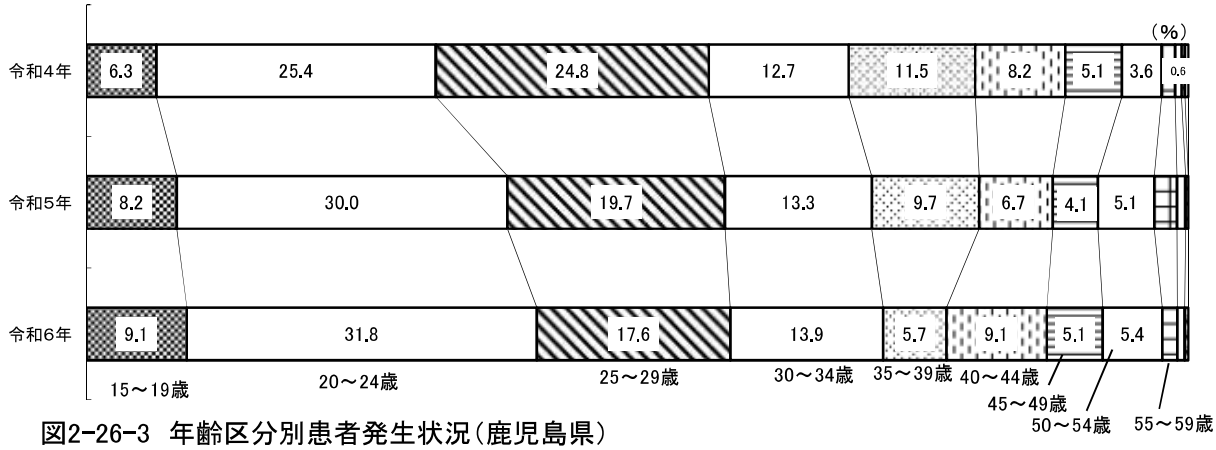


図2-26-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）